

GENDA LIBRARY

小説

(評者) 中嶋嶺雄(東京外語大教授)

『古井戸』

鄭義著
藤井省三訳

農村の伝統と土着を素材に中国文学が到達した新しい「地平」

天安門事件の悲劇を結末した中国の民主化運動は、所詮、学生や知識人の運動であって、人口の八割を占める農民は動かさなかったし、従って中国民衆から浮き上った運動でしかなかったのではないかと、と言った解説を耳にすることがある。そのような意見は、中国民主化運動の最近の到達点をほとんど見極めておらず、中国の新しい知識人たちの鋭い問題意識と苦悩を十分に見すえていないのではないかと。

鄭義は、まったく新しいタイプの農村小説『古井戸』(原題「老井」)で、中国農村の伝統と土着の闇のなかに輝く一筋の光明を照射していると思う。一九七九年から八三年までの山西省の辺境の農村を、村に散在する古井戸をめぐるドラマを通じて描くことによって、中国の農村も農民も少しも変わらない、といった見方への一つの反証を提供しているのだ。

もとより、この小説の舞台である老井村がその断面でもあるように、中国農村には牢固として変わらぬ迷信や因習が支配されている。その中で文化大革命以後の世代の農村青年の生活実態が、井戸に由来する村の正統な家系を受けつぐ孫一族の主人公・孫旺泉と、彼との結婚が許されない新しいタイプの女性・趙巧英との恋愛を中心に描かれているのだが、脇役の村の共産党書記・孫福昌も、従来の中国の小説と異なって、党員でありながら党の政策にも懐疑する両義的なタイプの人物として描かれており、それだけにリアリティをもっている。

この小説は、すでに映画化されてわが国でも話題を集め(一九八七年の東京国際映画祭グランプリ受賞)、また同様に話題を呼んだテレビ・ドキュメント

『河陽』(蘇曉康・王魯湘作)の第二部に本書の著者が登場して注目されたが、ここに訳出された原作は、さらに密度の濃い筆致で『古井戸』をめぐるドラマや農民同士のいさかい、つまり「械闘」(一種の「武闘」)の場面などを伝えていて臨場感にあふれている。

この作品についての解説は、訳者の藤井省三氏が専門家の立場から見事になされているので、ここで蛇足を加える必要はないであろうが、次の二点をあえて指摘してみたい。

『悲情城市』の手法

その一つは、この小説がかつて五〇年代の趙樹理や周而复さらには王蒙らに代表される当時の新潮流の農村文学、党員文学とも、また、文革直後に流行した、いわゆる「伤痕文学」とも異なり、中国・社会の同時代史的断面をイデオロギー抜きで描き切ることによって、作品の重みをかえって増していることである。

アメリカのミステリー界では、この数年、児童虐待を素材にしたものが増えているが、『ホラーの魔術師』ジョン・ソー



その魔術に近づくな!

やはり再婚で、連れ子の少女ベスは、先妻の子の義姉と祖母の杜絶ないじめにあっていて、そんなとき当主は、100年前に火事で焼け、放置していた靴工場の再建工事を始める。あの廃墟には手を出すな」と遺言した先代の意向を無視して、で、怪事件、怪死事件が……となる。お定まりの設定、構造ではあるが、さすがはソール、終盤へ向けて異様な緊張感の盛り上げに成功、読ませる。デビュー作で秀作の『暗い森の少女』を連想させる出来なのである。(田)

ここに、中国の現代文学が到達した新しい地平があるのであり、このような作品を世に贈った著者の、創作の自由を現に抑圧している体制に未来はあり得まい。

ある。この点では台湾の注目すべき映画『悲情城市』で脚光を浴びた侯孝賢監督の手法にも通じている。

二つは、この作品の背景をなす竜王信仰や「逆さ井戸」にまつわる村の創世神話の世界が活きていて、中国農村の土俗性を十二分に感じさせる点についてである。昆侖山の女媧兄妹の神話や、多くの洪水神話、泥土造人の神話など中国各地の創世神話とは異なる世界を作者がとらえたことに、私は大変興味を覚えた。



●乳がんをかかえて生きる女たち(山中登美子著) 廣済堂出版・定価1300円/女性が、乳がんて乳房切断術によって乳房を失うことは、どういふことなのか。46歳で、都立駒込病院で手術をした著者自身の闘病記。医療費問題での「むなししい闘い」は、同情と怒りを感じた。

●スター・クレジー(女優編)入男優編(中野翠著) 河出書房新社・定価各1500円/映画が好き、スターが好き」とミーハーを自任する著者初の映画エッセイ。両編とも巻末にある「同病」のイラストレーター・石川三千子との我田引水の対談「ネマキでキネマ」は楽しめる。

大人のエンターテインメント

物語の舞台はアメリカの田舎町、登場人物の中心は女たち、展開は過去の因縁話と地縁、血縁の人間関係を軸に進む。町を牛耳る旧家の当主の再婚相手は、